



大阪市 道頓堀川

# 水の都大阪の再生

水の都再生のリーディングプロジェクトとして、道頓堀川で水辺整備事業を進めています。



現在の道頓堀川



道頓堀川遊歩道完成イメージ

## ● 背景 ●

### オープンスペースとしての水辺の再生が急務です。

大阪は長い歴史の中で、産業、人、暮らしが結びついて発展してきました。江戸時代には「天下の台所」として日本中から物資が集まってきましたが、その物流基盤が市内を縦横にはりめぐらされていた運河でした。

高度経済成長期に市内の物流の主役が船から車に替わり、多くの運河が埋立てられました。今でも河川面積は大阪市の約1割を占め、まちづくりを考える上で大きなポテンシャルを有しています。

その大阪は、早くから雨水排除と下水道の普及が重要な課題でした。そのため、合流式下水道<sup>\*1</sup>を採用して事業を推進してきました。しかし、雨が強くなり、下水の量が増え、下水道の処理能力を超えると、未処理下水が流れ出し、水質汚濁の原因の一つになっています。

また、道頓堀川沿いの建物は、すべて川に背を向けた状態で建てられており、川が街の裏側のような空間となっています。

大阪の持つポテンシャル、「川」という資源を生かすために、河川環境を改善し、それとともに、水を活かした新たな景観づくり、にぎわいづくり、環境づくりに努め、新たな都市魅力の再生を図ることが求められています。

同時に、治水・都市防災の観点からも既成市街地を安全・安心な水辺都市へ転換することが求められています。

## ● 事業内容 ●

### 水辺に親しめる遊歩道を建設します。

平成12年に、道頓堀川最下流と道頓堀川の上流に位置する、東横堀川の最上流に2基の水門が完成しました。この水門により以下の4つの効果が期待されています。

1. 道頓堀川、東横堀川の川沿いを高潮から守ります。
2. 水門内の水位を一定に保ちます。
3. 水門の開閉操作を行うことで、上流からの汚れた水をシャットアウトします。
4. 閘門<sup>こうもん</sup><sup>\*2</sup>機能を持たせることで船運の活性化を図ります。

また、合流式下水道を雨水貯留管<sup>\*3</sup>の建設等により改良し、水門建設とあわせて水質の改善を図ります。

さらに、この水辺整備事業の中心として、幅が約8mある遊歩道を川の両側に整備します。遊歩道は水面にできるだけ近い高さに整備することで、親水性の向上を図ります。

## ● 事業効果 ●

### まちと一体となったにぎわい空間の創出を目指します。

河川の水質改善や遊歩道の整備により、川沿いに人々が集まるようになります。すると、人々が遊歩道から直接アクセスできるように、周りの建物は徐々に川の方へ表を向けるようになります。さらに、平成15年度に戎橋のデザインコンペが実施されましたように、橋梁の架替事業や美装化があわせて計画されており、結果として、道頓堀川とまちが一体となったにぎわいの空間が形成されるものと期待しています。

この遊歩道は大阪有数の繁華街であるミナミにおけるオープンスペースの基幹として、まちのにぎわいの基盤となることを目指しています。

#### 用語解説

\*1 合流式下水道とは、古くから下水道を整備してきた都市にみられる下水道で、汚水と雨水をまとめて下水管で流す方式をいいます。昭和30年代以降は公害問題が顕著化してきたため、汚水と雨水を別々の下水管で流す、分流式下水道による整備を進めています。

\*2 閘門とは、運河、放水路等において、水位差のある水面の間に船を通過させるために水位を調節するための堰のことです。

\*3 雨水貯留管とは、降雨時初期の汚れた雨水を貯留するための管きよのことをいいます。